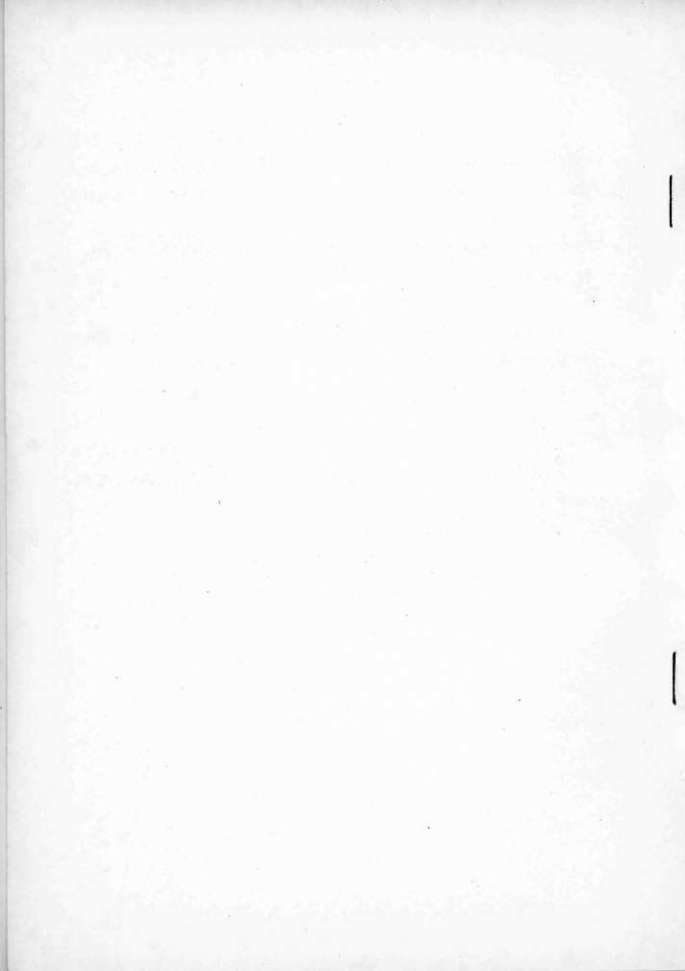


戸田市文化財調査報告 XI

美女木八幡社脇遺跡第2次発掘調査概要

埼玉県戸田市教育委員会



序

古代の美女木の姿を明らかにするため、昭和49年度に次ぐ第2次美女木八幡社脇遺跡の発掘調査が灼熱の太陽の下で究学の心に燃える若人の協力により実施されました。

第1次調査においては発掘地点と美女木八幡社との関連が問題視されましたが、今回の調査によって発見された堀の遺構がかっての美女木八幡社のものであると判明し、当地の歴史の緒が考古学の次元からもほぐされてきたわけです。

美女木八幡社は史料等から推して1335年以前の建立と考えられ、戸田市内の神社で最も古く、鎌倉の鶴ヶ岡八幡宮と関係のある由所ある神社です。

私達はこれが郷土戸田の関歴を代表するものの一つとして、さらに広く、さらに詳しく究明の手を尽す必要を感じております。

さいごに、本調査にご協力いただきました地主の鶴岡氏をはじめとする地元の方々および蔵、戸田両高校のみなさん、各大学の学生諸君に対し厚くお礼申し上げます。序といたします。

昭和51年3月

戸田市教育委員会

教育長 岡 田 弘

例 言

1. 本書は、昭和50年8月19日～8月24日にかけて実施した、戸田市大字美女木字三宝谷所在の「美女木八幡社脇遺跡」の第2次発掘調査の報告書である。
2. 調査事業は、戸田市教育委員会が主体となり実施した。
3. 発掘調査の担当者は、次の2名である。
塩野 博（日本考古学協会員）
伊藤 和彦（日本考古学協会員）
4. 出土品の整理は、担当者が行なった。
5. 本書は、塩野 博が執筆した。
6. 発掘調査にあたっては、地主の鶴岡洋吾氏をはじめ、県立戸田高等学校、蕨高等学校の郷土研究部の先生および生徒諸君、慶応大学・国学院大学・立教大学考古学研究会の有志の方々にお世話になった。
7. 八幡宮領御朱印地並境内御除地の図面は鶴岡洋吾氏の御好意により、写真撮影を行ない、本書に登載した。
8. 出土遺物について、安岡路洋氏の御教示を得た。

目 次

序	教育長 岡田 弘
例 言	
はじめに	1
第2次調査区の概要	2
ビット群	6
井戸跡	8
堀遺構	10
出土遺物	11
おわりに	16



写真1 遺跡遠景

はじめに

美女木八幡社脇遺跡は、戸田市大字美女木字三宝谷に所在する。この地は、鎌倉の鶴岡八幡宮の神領地の中心と考えられるところで、戸田市で過去何回か経験した遺跡とは、性格を異にする遺構の発見も予想された。

そこで、昭和49年8月、美女木八幡社脇遺跡の性格を把握するため、第1次調査として、この遺跡の最南端に調査区を設けて発掘調査を実施した。この場所は、地表に土師器の細片が散布していたが調査地区が、自然堤防上でも、南側の水田に接するところであったため、良好な遺構、遺物の発見はなかった。しかしながら、南一北に傾斜する黄褐色粘土層の基盤の上に堆積した暗褐色土および黒色土の中から、弥生時代から室町時代にわたる遺物が若干発見され、今後の調査に期待がもたれた（美女木八幡社脇遺跡第1次発掘調査概要「戸田市文化財調査報告Ⅹ、昭和50年3月」）。

今回の第2次調査は、第1次調査の経験から、調査区の選定については、慎重に検討したが、さしあたり、第1次調査区で発見された遺物を伴う遺構の検出が急務であると考え、第1次調査区に続けて調査区を設けることにした。調査実施地区は、期間の関係から広範囲にはとれず、休耕地地を利用することにした。地主鶴岡洋吾氏の承諾も得られ、昭和50年8月19日から、第1次調査区の北側にグリットを設けて、発掘調査を実施した。



写真2 第2次調査発掘風景

第2次調査区の概要

調査は、グリット方式をとり、調査予定地全体を発掘することにした。まず、第1次調査で、この地区の基盤（地山）は、黄褐色土層で、現地表面から平均50cmのところにあることが判明しているので、堅く締った表土の除却については、あらかじめ機械力を使用し排土した。

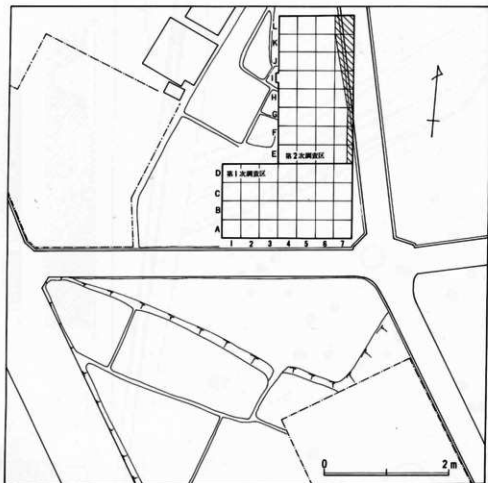
グリットは、第1次調査区に続けて、E4～L7まで40グリット（1単位グリット3m×3m）を設定した。しかしながら、E7～L7の7列目の8グリットは、排水路や舗装された道路にかかり、全てを調査することができなかった（第1図）。

調査区の地山は、全体的に平坦で、遺構の検出は容易であった。第2次調査で発見された遺構を概観すると、おおよそ次のようである（第2図、写真3・4）。

この調査区では、堀1、溝状遺構1、ピット50、井戸跡2が検出された。堀遺構は、調査区の最も北寄りに発見されたもので、ほぼ東一西に走るものである。遺憾ながら調査区の関係から、これの西および東側への延長については明確にすることができなかった。

溝状遺構は、第2号井戸跡の南側に発見された狭く浅い溝で、調査区北隅に発見された堀と平行に走っている。

ピット群は、調査区中央、堀遺構と井戸跡の間に集中している「第1ピット群」と、調査区南寄り

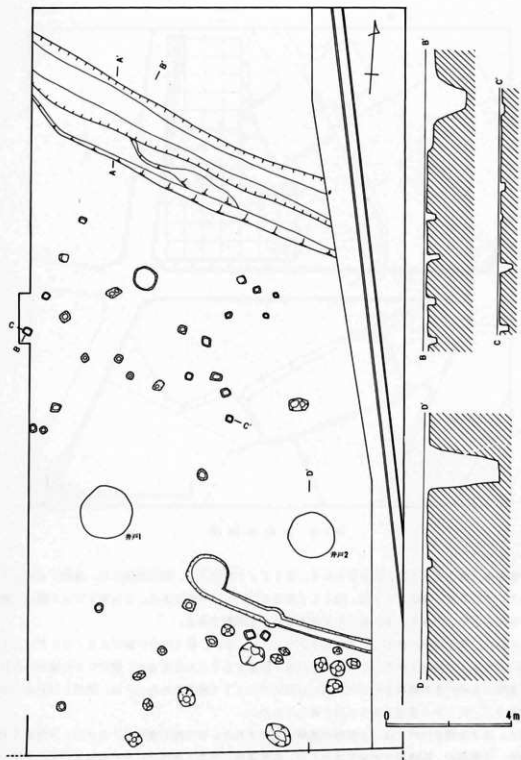


第1図 遺跡全測図

に位置する「第2ピット群」に分けられる。第1ピット群のうち、特に西隅には、連続するピット列が存在しているが、他のピットは、列として把えることが不可能である。また第2ピット群は、形態及び規模が不整いであり、また列として把えることも困難である。

井戸跡は、第1号井戸跡が、G4・G5グリットに、また、第2号井戸跡がG6・G7グリットとG列のグリットで発見された。これらの井戸は、後述するところもあるが、鑿穴にも相違がみられ、出土遺物にも時代差が観取されるが、共にG列のグリットで検出されたことは、偶然とは云え、水脈の関係など、何らかの要因があるものと考えられた。

以上、第2次調査区内では、5種類の遺構が発見された。また出土遺物は、各グリット内から土師器細片、須恵器片、陶磁器片が発見されたが、直接遺構に伴う遺物は、井戸内発見のものを除いてはなかった。



第2図 遺構全測図



写真3 遺構全景(南から)



写真4 遺構全景(北から)



写真5 第1ビット群(東から)

ビ ッ ト 群

第1ビット群 (第3図、写真5・6) 調査区中央、堀遺構と井戸跡の間に集中して検出されたビット群である(第3図P1-P22)。この他、これらから若干離れてP23-P27がある。

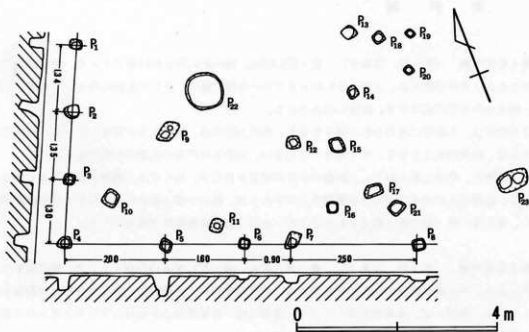
ビットの形態は、概して隅丸方形を呈するものである。P22は、ビット群のほぼ中央に位置している円形のものであるが、深さは5cmで、他のビットに比較して浅いものである。

これらのビット群のうち、P1-P4が南-北方向に直線的にならび、P4-P8が東-西方向にならぶほかは、他のビットの配列には規則性をみだせない。ほぼ規則性の観取できるビット列の心間寸法の寸法をみると、南-北列のP1-P2が1.34m、P2-P3が1.35m、P3-P4が1.30mでほぼ等間隔にならんでいる。また、東-西列のP4-P5が2.00m、P5-P6が1.60m、P6-P7が0.90m、P7-P8が2.50mである。このうち、P6-P7間が狭いが、P5-P7間では、P7-P8間と同じ2.50mとなる。これら、直線的にならんで発見されたビットは、概して小規模なものであるが、覆土には、粘土粒子および炭化物が含まれており、他のビットに比較すると明瞭にその存在が確認できた。また、これらのビット内からは、土師器および須恵器の細片が若干検出された。

第2ビット群 (写真7) 調査区南寄りに集中して発見されたビット群であるが、規模・形態とも不整であり、規則性も観取されず、それぞれの相互関係は不明である。



写真6 第1ピット群(南から)



第3図 第1ピット群実測図



写真7 第2ピット群と井戸跡

井 戸 跡

第1号井戸跡 (第4図、写真8) 東-西1.65m、南-北1.70mの円形プランで、井戸底まで、1.84mある。井戸の鑿穴は、上部から0.40mまでロート状に掘り、そこで直径0.90mにつばまっている。推定された井戸底は平で、直径0.42mである。

この井戸は、人為的に埋められた様子もなく、井戸上部には、暗黒色土が充填していた。井戸底近くからは、砂質黒色土となり、水が湧きでてしまい、完全な井戸底の位置は不明である。

出土遺物は、黒色土最上部で、土師器の小片が発見されたが、深くなると遺物の出土はなくなる。そして、底部近くの湧水で湿った砂質黒色土の中からは、杭の一部と思われる木片や、竹の細片が出土し、最も深い所(井戸底と推定されたところ)から、須恵質陶器片が発見された。

第2号井戸跡 (第5図、写真9) 東-西1.40m、南-北1.30mの円形プランで、井戸底まで、2.20mある。井戸底は直径0.60mの平底である。井戸の鑿穴は、直線的で、第1号井戸とは形態を異にしている。堆積土は、灰黒色を呈していた。底部に近い砂質黒色土からは、マコモと思われる腐蝕した繊維質の植物や、木片、竹片が多量に発見された。

また、出土遺物としては、底部から、ウルシ塗りの椀の破片(同一個体)が発見された。



写真8 第1号井戸跡

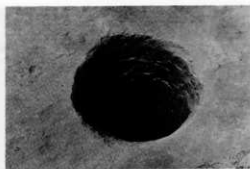
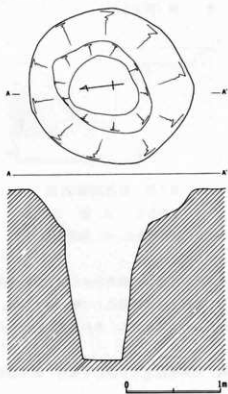
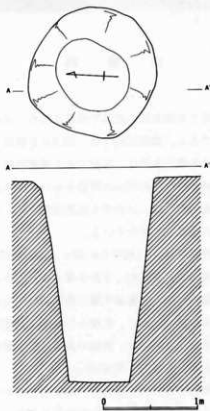


写真9 第2号井戸跡



第4图 第1号井戸跡实测图



第5图 第2号井戸跡实测图



写真10 堀 遺 構 (東から)

堀 遺 構

第2次調査区の北隅で発見された、ほぼ東一西に走る堀である。調査区内では、10.5mを検出した。

この堀の南側は、基盤である黄褐色粘土を深さ約10cm北側に平均幅約70cmの間隔をおいて掘られている。

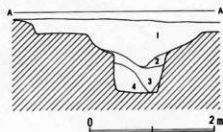
堀の形態は、いわゆる箱葉研型を呈しているが、上部は、かなりくずれている。

計測値は、上幅平均1.80m、底幅0.70m、深さ平均1.00mで、東に向かって若干深くなっている。

堀内には、一番最下層に砂質褐色粘土が南側から流れこみ、その上部に、同方向から粘土質の黒色土が堆積し、次に、北側から褐色土が流れこんでいる。そして、最上部は暗褐色土で覆われている。

なお、この堀は、基盤の黄褐色粘土層を掘り割って造られたもので漏水性は、きわめて良好なものである(第6図、写真10)。

堀内からの出土遺物は、暗褐色土層から主として陶磁器類、粘質黒色土から鉄釘や貨幣、砂質褐色粘土層から須恵器の破片が検出された。



第6図 堀遺構断面図

1. 暗褐色土
2. 褐色土
3. 粘質黒色土
4. 砂質褐色粘土

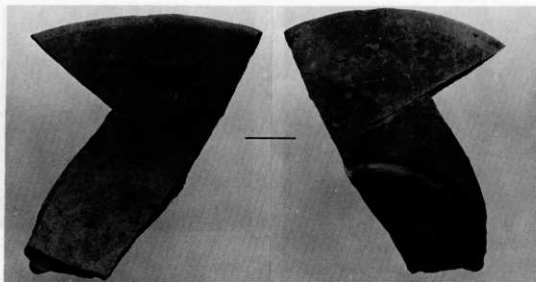
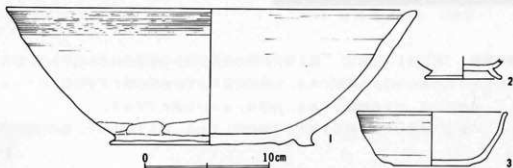


写真11 須恵質陶器



第7図 須恵質陶器及び須恵器実測図

出土遺物

土師器 第1次調査区では、五領式土器の口縁部、底部および台付変形土器の台部が検出されたが今回の第2次調査区内では、器形を窺える土師器は検出されなかった。

第2次調査区では、堀遺構の上部土層、第1号井戸跡上部、L5グリットから細片が発見された。

須恵器 (第7図2・3) 2は、K7グリットから検出された高台付坏の破片である。この坏の高台は、ラッパ状に開くものである。3は、堀遺構の砂質褐色粘土層から出土した坏である。坏部は直線的で深い。また底部には、糸切り痕を有している。

このほか、ピットやグリット内から細片が検出されている。



写真12 古伊万里茶碗



写真13 清水焼茶碗

須恵質陶器 (第7図1、写真11) 第1号井戸跡の底部付近から発見されたものである。断面三角形の作り出された高台の付いた鉢形である。口縁部付近および中央部が横ナデで整形されているのに対して、底部付近は、ヘラの横削りである。内部は、きれいな横ナデである。

なお、この鉢は、破損した後、内面を硯として再利用しており、墨をすった痕や、墨の付着が認められる。

瓦質陶器 堀遺構上部土層から摺鉢の破片が検出されているほか、この種の陶器は、細片で検出された。

陶磁器類 陶磁器類(近世の窯業製品)は、各グリット、および堀遺構、ピットから発見されているが、すべて破片である。

1. 伊万里焼 (写真12・14) 今回の調査区で最も多く検出された遺物は、この伊万里系統の磁器である。いわゆる寛永以後の古伊万里が2片(写真12)と、江戸時代末期の後期伊万里(写真14)で、しかも、日用雑器の茶碗類、皿などで、青磁も検出されているが、染付が圧倒的に多い。
2. 瀬戸焼 (写真15) 伊万里焼の日用雑器類に次いで多く検出されたのが、近世の瀬戸焼の日用雑器である。
3. 清水焼 (写真13) 竹を絵描いた茶碗が1個検出された。
4. 常滑焼 第1次調査区では、特徴的なN字形の口縁部が検出されたが、第2次調査区では、胴部

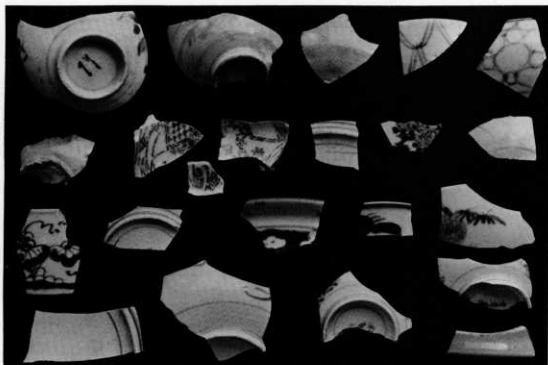


写真14 伊万里焼

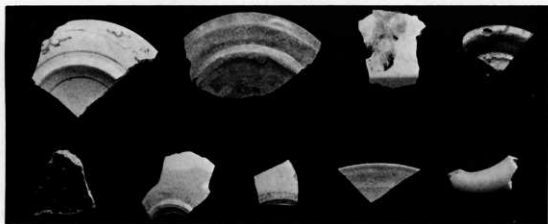


写真15 瀬戸焼

部の小破片が検出されている。

5. その他、生産地不明の陶磁器破片も検出されている。

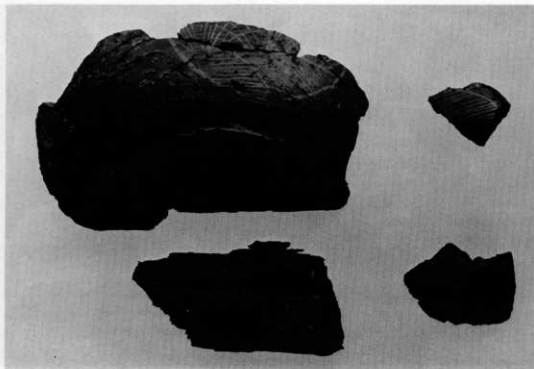
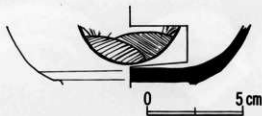


写真16 漆器 (木碗)

漆器 (第8図、写真16) 第2号井戸底部付近から発見された木碗である。口縁部および、高台が欠損しているが、器形は推定できる。

表面は黒漆、内部は朱漆が塗られている。なお、表面には、朱漆で円と、円の中に円弧が描かれ、さらに、それぞれの円弧の中には方向を違えて、斜線が引かれている。



第8図 漆器 (木碗) 実測図

鉄製品 (第9図1～5、写真17) 鉄製品としては、釘が堀遺構から発見された。すべて、断面方形のものである。1・2は、頭部が角形を呈している。1の長さは現状で7.50cmである。4・5は頭部を欠失している。

古銭 (写真17) 堀遺構中から検出されたものであるが、さびが進み、内郭は欠損し、また、面の文字もつぶれ、背文も不明である。

石製品 (第9図6) 堀遺構上部土層から出土した砥石で、四面磨かれている。現品の長さ6cm

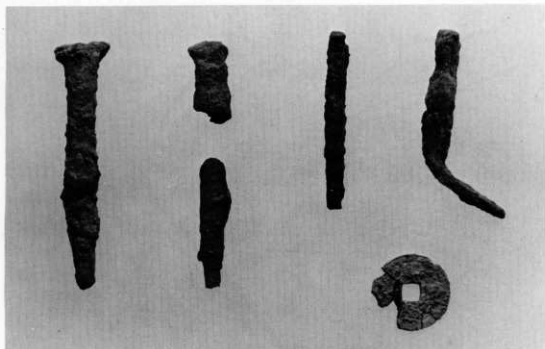
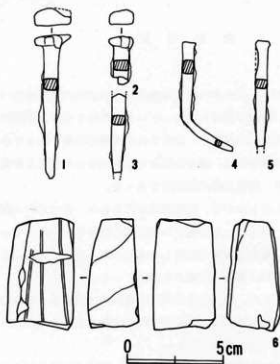


写真17 鉄釘及び古銭

である。四面が使用されているが、このうちの一面には、幅の狭い刃物を研いだと思われる痕跡が残っている。

その他の出土品 第1号井戸跡から竹片、第2号井戸跡から木杭の一部が発見された。竹片は、先端が尖っており、井戸底に刺してあったものと考えられる。また、第2号井戸跡検出の木杭片も井戸に刺してあったもの一部と考えられる。



第9図 鉄釘及び砥石実測図



写真18 八幡宮領御朱印地並境内御除地図

おわりに

以上、美女木八幡社脇遺跡第2次調査の概要を述べた。最後に、この調査の結果を整理するとともに、鶴岡洋吾家に伝わっている、明治2年9月作図の八幡宮領御朱印地並境内御除地図を参考にして調査地区の確認と、検出された遺構の性格を考えてみることにする(写真18・19)。

八幡神社は、鎌倉街道から延長200mの真直な参道、周囲に構堀をそなえた広大な境内地を有しており、旧笹目郷の惣鎮守であった。

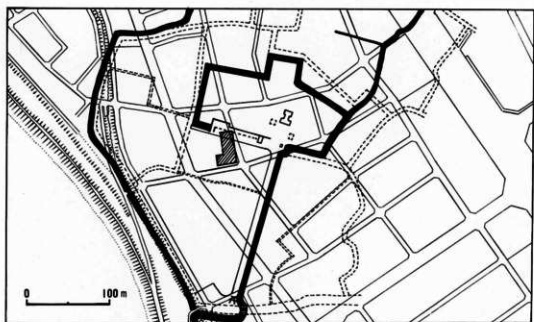
しかしながら、区画整理が行なわれ、かつての八幡神社を中心とした様相は一変し、そのおもかげは、狭くなったが現在の境内地に見られるのみとなってしまった。しながって、美女木八幡社脇遺跡は、現在の段階で銘名した名称であって、ことによると神社の境内地であったかも知れないという疑問を第1調査の段階から持っていた。

そこで、明治2年作図の八幡宮領地図面を、現在の地図上に復原してみると、第10図のようになり昭和49年度および昭和50年度に発掘調査した場所は、別当寺の円通寺および八幡宮神主宅の門前であったことが判明した。

第2次発掘調査(昭和50年度)区内で検出された遺構は、堀遺構、ピット群、井戸跡、溝状遺構であった。



写真19 八幡宮領御朱印地並境内御除地図



第10図 八幡社境内復原図

調査区北隅で検出された堀遺構は、明らかに神社境内を囲っている構堀であろうと考えられる。しかしながら、明治2年の図面では、門の左脇まで描かれており切れた状況を示している。だが、この構堀を延長すると、第2次調査区北隅で発見された堀遺構に合致する。したがって、ここで発見された堀遺構は、それ以前には所在していたものであり、明治2年当時は、すでに埋まって、その用をなしていなかったものと考えられる。

つぎにピット群であるが、前述したように2つのグループがある。そのうち、第1ピット群は、列として扱えられるものがあり、建物遺構があったものと考えられる。それにしても、明治2年の図面には描かれておらず、ピットの規模からみても、大規模な建築物ではなく、祭礼の時に使用する仮小屋的なものであろう。また、第2ピット群については、その配列に規則性が観取されず、建物遺構とみるのは困難である。

井戸跡は2基検出された。第1号井戸からは、須恵質陶器が、また、第2号井戸からは、木碗が出土した。この須恵質陶器は、鎌倉時代以降、中世の所産と考えられる。また、木碗は、その形から、江戸末期のものである。したがって、これらの井戸は、その鑿穴の違いとともに、時代差のあることが判明した。しかしながら、これらの井戸が何のために鑿穴されたかは不明であるが、前述したピット群との関連性も考えられよう。

以上のように、美女木八幡社脇遺跡第2次発掘調査の成果は、八幡神社の構堀の発見と、それと関連性のある各種遺構の発見にあり、また、概略ではあるが、旧八幡神社の境内地を、区画整理事業の終っている現在の平面図に復原し得たことであろう。

昭和51年3月15日印刷

昭和51年3月20日発行

戸田市文化財調査報告 XI

美女木八幡社協遺跡第2次発掘調査概要

発行 戸田市教育委員会
印刷 株式会社 信陽堂

1
1

1
1

THE UNIVERSITY OF CHICAGO
LIBRARY
540 EAST 57TH STREET
CHICAGO, ILL. 60637

UNIVERSITY OF CHICAGO
LIBRARY

